



300回目の反原発のアピール行動に参加する人たち 8日、県庁前

金曜夕は反原発 アピール300回に

原発の再稼働反対を訴えて、毎週金曜日の夕方に県庁前でアピールを続けてきた市民活動が、8日で300回を迎えた。この日は雨が降る中、会社員や主婦、弁護士ら約40人が集まった。どんな思いで参加しているのか。

1回目のアピールは、2012年7月13日。この12日前、関西電力大飯原発3号機が、東京電力福島第一原発の事故後に定期検査入りした原発で初めて再稼働した。それをきっかけに、レゲエ歌手のシング・ジェイ・ロイさんが反対を訴えようと呼びかけたのが始まりだ。その後、本人は参加しなくなったが、アピールは続いた。

299回参加したというのが、福井市の西村明宏さん(74)。11年の秋、ボランティアとして福島県に1カ月ほど滞在し、妻と子どもを新潟県に避難させて、仕事のために1人で福島に残ったという男性の話の聞き

県庁前で毎週「止まるまで続ける」

た。「地震や津波の被害も大変だが、原発がなければ、こうはならなかったはずだ」

反対の声を定期的にするのが、世論の広がりにつながる。毎週ここに立つことが、一緒に声を上げようという訴えにもなるはず。だからちよっと体調が悪くても、ここに来ようと思えます」

唯一参加できなかった1回は、東京で原発を訴える行動に加わった。「核のごみを子どもや孫、未来の人たちに残すことを、人間として許してはいけない。原発を止めるのが、今を生きる者の責任だと思おう」

福井市の会社員、落谷義行さん(55)は旧ソ連のチェルノブイリや米スリーマイル島の原発事故で、「原発は人間の力では制御できないもの」と感じていた。そして、福島で事故が起きた。それまで原発を止められなかったことが悔しかった。1年ほど前からほぼ毎週、仕事が

終われば足を運んでいる。「危ない原発を動かす必要はない。止めるのは今のうちだ」

福井市の70代の女性は、福島の原発事故が起きるまで「嶺北にいる自分には、あまり身に迫るものではなかった」と振り返る。しかし、事故後に福島に戻る。しかし、事故後に福島に戻ることができず、ふるさとを失う人たちを見て、「そんなに恐ろしいものが福井に15基もあるなんてとんでもないと思った」と話す。

母親の介護などで夕方の外出は難しいが、節目にはなるべく参加するようにしている。「私のように、来たとしても来られない人はいる。だから、来られるときには来て、つないでいきたい。通りがかりの人が参加してみようと思うかもしれないし、原発について考えてみるきっかけになるかもしれない。諦めません」

300回の中には、参加人数が10人に満たないときもあった。それでも、「やり続けようというみんなの意志があったからこまで続いた」と中心メンバーの一人、林広員さん(58)は語る。「福井に住んでいる人たちが、原発はいらないと声を上げることが大事。自分のため、福井のため、後の世代のために、原発が止まるまで闘い続けます」

(南有紀)